



教員採用選考試験に臨む皆さんへ ～“教師”を一生の仕事として選ぶために～

文学部教職課程

教授 佐藤 敬子

はじめに

○教員免許がなくてはなれない「学校の先生」

教員免許を取得していない人でも、大学の先生になることは可能です。

しかし、幼児教育も含め、小・中・高等学校の先生になることはできません。

教員免許を取得した人は「学校の先生」はもちろんのこと、たとえ教師の道を選ばなかったとしても、そのスキルを活かすことはできるでしょう。

教職課程で身に付けた“児童生徒をわかってもらう”“相手に伝わる伝え方”などの能力は教科の専門知識以上に社会人として必要なスキルだからです。

児童生徒理解で身に付けた力はお客様の気持ちに寄り添う仕事ができるでしょうし、対人援助職にもその力が発揮できます。授業力で身に付けたプレゼン能力はどのような場面でも聞く人に説得力のある提案ができるでしょう。

○10年20年後も必要な先生

人生100年時代となった今、2007年に日本で生まれた子どもが107歳まで生きる確率は、50%もあるそうです。新たなステージに突入する社会で、生き方、働き方、教育のかたちも大きく変わっていくでしょう。今やAI（人工知能）の技術の発展により、人々は便利な生活が送れるようになりました。

黒板は電子黒板に代わり、ペーパーレス、プログラミング教育、Webによる遠隔授業などここ数年で教育現場を取り巻く環境も大きく変化しました。

10年後には、50%以上の仕事はAIが人間に代わってしてくれると言います。

つまり、労働人口の約半分は技術的に人工知能で代替可能になり、今ある職業の半数は大きく形を変えるか消滅してしまうのです。

姿を消してしまうであろう多くの職業のリストには「中学・高校の先生」が入っています。

ただし、そこには「知識や情報を伝達するだけの先生」と条件が書かれていました。

確かに単に教科書を使って知識や情報を伝えるだけなら、AIやロボットの方がよほど正確に早く仕事をこなしてくれるでしょう。休日や放課後も「時間外なので対応しません」とシャットダウンし8時間の勤務時間もきっちり守ることでしょう。

しかし、そういう先生を心から信頼し、大人になってもあこがれの存在として子どもの記憶に残るでしょうか。

AIには代われない教師とは教科教育だけでなく、子ども一人一人の気持ちを丁寧に受け取り、心豊かな人格形成をするとともに将来、社会的自立を果たすための支援ができる「人間力」を持っている人なのです。

○教員の仕事・役割とは

2006年に経済産業省が提唱した「社会人基礎力」は、「現代社会で求められる力とは何か？」という問いに対し、「考え抜く力」「前に踏み出す力」「チームで働く力」という3つの能力とそれぞれに紐づく12の能力要素で答えるものでした。人生100年時代の新しい「社会人基礎力」のポイントはまさに「学び」です。

教師の仕事は「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「どう活躍するか」という、視点から目の前の子どもたちを育てることです。

教員とは、単に生徒たちに勉強を教えるだけの仕事ではありません。

生徒一人ひとりと徹底的に向き合い、自立した人間を育て、個人の能力を伸ばすという役割を担っています。

「テーチャング」や「トレーニング」も必要ですが、今も昔も、それ以上に「コーチング」と「カウンセリング」の能力が求められているのです。

また、実際の仕事内容は学級経営、部活動の指導や進路指導、学校の事務作業、保護者や地域住民との関係構築など、多岐に渡ります。

教育現場には、いじめや不登校、児童虐待、学級崩壊（学校が機能しない状況）、難しい保護者対応など、さまざまな課題が山積みとなっています。

それらの課題と真摯に向き合い解決する能力や姿勢こそ、教師には必要です。

毎日毎日が子どもと向き合い、人を育てるといった尊くも責任重大な仕事なのです。

○それでも目指しますか？

教育職を目指している皆さんが「先生になりたい」と考えたのはいつからでしょう。

そして、そう考えるきっかけになったのは、何でしょう。

おそらく誰かとの出会いや、誰かのことばが、あなたが将来の仕事として教師を選ぶきっかけになったのではありませんか。だとすれば、あなたも子どもたちに「先生みたいな先生になりたい」と将来の夢を描けるような教師になりたいものです。

私は大学卒業と同時に公立中学校の教員となり、また、指導主事として県の教育行政にも長年関わり、文部科学省で全国の幹部教員を育ててきました。

学校勤務の時は授業構築や成績処理、生徒指導など多くの公務分掌をこなし、徹夜や休日出勤など当たり前、部活動では夏休みも年末年始も練習に明け暮れました。

教育行政では議会対応、予算折衝など職場で朝を迎えることもありましたが。（今は“働き方改革”により、そのような場面は少なくなりました）

どちらも大変な疲労を伴う激務でしたが、疲れ方に違いがあります。

子どもたちと関わる教育現場での疲労には、不思議な心地よさがありました。

子どもたちの人生に寄り添う「教師」とは本当にやり甲斐のあるすばらしい職業です。

それは大学の教員として学生と過ごした年月も全く同じです。

全国の教員や管理職の研修で、受講者の教頭、校長となった管理職の先生方からは「教育現場は本当に大変です。でも、それ以上に子どもは可愛いのですよね」ということばを聞きます。

将来の仕事として「教師」を目指し、夢を叶えたいと真剣に努力している皆さんを心から応援し、一人でも多くの皆さんが教壇に立つことができるよう今、何をすべきか、どのような勉強法が効果的であるかをまとめました。

読むだけでなく、この冊子を手にした日から行動を起こしましょう。

社会に出てからも皆さんの人生は80年以上あるのです。

今、ここで「本気」が出せるか否かでその人生の足跡は大きく変わるはずですよ。

公立学校の教員採用試験は全国47都道府県と20の政令指定都市の教育委員会が毎年実施するもので、ほとんどの都道府県、政令指定都市では一次試験で一般教養や教育職に関わる教職教養、教科の専門性を見られ、二次試験以降で人間性や教員としての資質、適性を見られます。前年度までの傾向を分析しても、最新の情報でも選抜で重視されるのは「人物評価」です。「模擬授業」では学習の中身よりも教壇に立った時の佇まい、つまり「先生としてふさわしいか」を評価され、面接ではコミュニケーション能力が最も重要視されます。筆記試験は、一人でも猛勉強してパスすることもあります、「コミュニケーション能力」を一人で伸ばすことはできません。早めの対策を取りましょう。

1. 教員採用試験受験までの道のり

教職課程の履修を始めてから教員採用試験当日までの時間はそう多くはありません。

一方で通常の授業やサークル活動、アルバイトやボランティア活動など時間を費やすこともたくさんある中で、教員採用試験に挑戦しようと思うのであれば、よほど効率のよい時間の使い方をしなくてはなりません。

中には他の公務員（行政職や公安職など）や民間企業の受験を同時に考えている学生もいるかもしれませんが、勉強の中身も試験時期も異なります。

自分の適性やこれまで積み重ねた勉強の量などを考慮して、ほんとうに自分が何を望み、何を優先すべきかを吟味し、早い段階で自分の希望進路を大筋で決定する必要があります。

迷っていたり、悩んでいるときは資格を持ったキャリアカウンセラーに相談してみましょう。

（1）自分に合った計画を立てる

まず、教員採用試験までにどんな分野を勉強しなければならないのかノートに書き、そのためにはどんなタイムスケジュールを組まなければならないか計画を立てます。

現役合格した多くの学生は、「就活ノート（受験準備ノート）」を作っていました。

3年後期までにはアルバイトなども整理して、勉強に集中できる場所と時間を確保しましょう。難関である教員採用試験をパスするためには、他の活動をしながら片手間の勉強では通用しません。

授業中も採用試験に関わる内容はとくに集中して能動的に受け、日頃解いている問題などで理解しづらかったところは先生に質問するなど、こまめに勉強量を増やしましょう。長期的な勉強には計画が大事ですが、その計画を成し遂げるためには習慣化が最も重要です。

大切なのは現役合格をすることです。

次の年に再チャレンジもできますが、年々勉強時間の確保がしにくくなり周囲に支援してくれる先生や励ましあえる友人がいない環境になっていきます。モチベーションを保つことが何より大変になります。「ダメなら臨時講師でも…」という安易な考えで臨んでは合格できません。

（2）教員採用試験受験までのスケジュール

①大学で実施される各種対策講座に積極的に参加

「面接対策講座」「模擬授業対策講座」など多くの講座が学内で実施されています。

HPや掲示物、授業中の案内など、情報をこまめにキャッチし、できるだけ多くのものに参加しましょう。2020年12月に実施された「絶対合格面接講座」では「受けると受けないでは大違い」「授業では教えてもらえないコツを山ほど修得した」などの感想が多数寄せられました。

あなたのことをよく理解してくれている指導者がいるのが大学です。

②模擬授業や面接等の練習に参加する

大学以外でも大手予備校などが主催する講座や単発の模擬試験などもあります。時間と費用などを考慮しながら上手に活用することをおすすめします。そういった講座を受講することは模擬授業や模擬集団面接など一人では対策できないことや、他の受講生と一緒に勉強することによって、ともに教員を目指す仲間同士、励まし合いモチベーションアップにもつながります。

③4月以降は自治体のHPをチェックする

各都道府県、自治体のホームページに教員採用試験に係る情報が掲載されます。採用人数や試験の形式などは自治体によって異なることもありますから、早めにチェックして願書を手し、情報収集をしましょう。

近年は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から試験のスケジュールそのものが大きく変わった自治体が多くありました。

また、各県・自治体が求める「教師像」「教師としての資質」や教育行政の方針などは各自自治体のホームページや実施要項の中にも謳われていますので明確に答えられるよう学習しておきましょう。

④教育実習が始の時期

「先生」として実際に生徒と接して、とても楽しい期間ですが、初めての経験で、全てにおいて毎日が不安と緊張の連続です。教材研究や指導案作成、審議を受け訂正を繰り返し、完成させ実際の授業研究、指導助言をいただく。また、学校行事への参加や部活動の指導補助など毎日が時間に追われます。また、家に持ち帰りの仕事なども多く、精神的にも肉体的にもエネルギーを使いますので、この期間に受験勉強はできません。

しかし、実際に教育現場から学ぶことが大変重要ですし、ここでの姿は教員としての適性を評価される場でもありますから、集中して実習に参加しなくてはなりません。

そのためにも早めに受験勉強に取り組むことが大切なのです。

⑤教員採用試験一次試験

一般教養（全ての県ではない） 教職教養 専門の学力試験（実技試験）

（※県によっては論述試験もあります）

時事問題は毎日新聞を読む習慣がないと解けません。専門分野は満点で当たり前なので失点のないよう、十分な準備が必要です。

⑥教員採用試験二次試験

模擬授業（場面指導） 口頭試問 実技試験

各自治体によって、時間配分や方法が違います。練習は指導主事経験や、現場で授業はもちろんのこと主幹教諭などの中心的なしごとをしていた教員を頼りましょう。

⑦教員採用試験三次試験

集団面接 集団討論 個人面接 適性検査

日頃のコミュニケーション能力や教育に対する情熱が伝わるかが評価されます。

2. 一次試験対策

(1) 一般教養

一般教養は幅広い分野から、「基本的な内容」が出題されます。主な出題分野は、「教科問題」「時事問題・一般常識」の2つに分けられます。出題構成は、主要教科が中心ですが、自治体によって各分野の出題比率が異なります。出題は広範囲にわたりますが、教科の内容については、中学校から高校までに学習した標準的なレベルの問題が大半です。

時事問題では、過去3年ほどの主要なニュースから出題があります。環境や情報の分野では、重点的に出題する自治体が少なくなく、国内外の施策や法律など近年の動向や基本的な知識が問われます。出題科目は国語、英語、音楽、美術、倫理、保健体育といった人文科学系、歴史、地理、政治、経済、時事問題といった社会科学系、数学、物理、化学、生物、地学、環境・科学といった自然科学系科目に大別できます。

最近の傾向としては、9割以上の自治体が出題しています。

環境問題、教育、情報、国際情勢、経済、医療・福祉、科学、スポーツといったジャンルから幅広く出題されるため、日頃から社会に関心を持っていることが重要です。

一般教養の出題範囲はとて広く、全ての分野をくまなく勉強するには膨大な時間がかかります。しかし、中学校レベルの「社会」「理科」「数学」が中心で、今まで勉強してきた内容なので日頃から疑問に感じたことはそのままにせず中学校や高校の教科書で復習することが大切です。

また、県独自の問題（ご当地問題）が出題されることもあります。

受験する自治体の政策や教育課題など日頃から新聞を読む習慣をつけてとくに、地方誌もチェックして地元の話題をチェックしておくことが重要です。

(2) 教職教養・専門教養

専門教養では、教科内容を中心に、指導要領や指導法も問われます。

中学・高校の各教科では、専門教科について、中学校から高校、大学までの学習事項について、専門的なレベルの出題があります。

学習指導要領からは、教科の「目標」「各学年の目標及び内容」など記述内容の詳細が問われます。暗記できるくらいの中身の熟知が必要です。

中学・高校の専門教科は、ほとんどが大学入試レベルの問題です。過去問題集を購入して徹底的に勉強することと、高校時代に使用していた入試問題集も役立ちます。

学習指導要領は、対象範囲の記述を、ある程度覚えてしまうことが必要です。近年の教職教養は、①教育原理、教育心理、教育法規、教育史の各出題領域の基本的な分野、②教育改革に関連する答申・報告、③いじめや不登校など具体的な指導事例などから出題される傾向にあります。教育法規や教育原理、教育心理などは事前にかんりの勉強をしておく必要があります。

また、今日的な教育課題「ICTの活用」「外国語教育の小学校導入」「プログラミング教育」「SDGs（持続可能な開発目標）」は常識的に熟知しておきましょう。

3. 二次試験対策

二次試験では、個人面接、集団面接のほかに、集団討論、模擬授業、場面指導などがあります。評価基準を踏まえた対策と場数を踏む練習が不可欠です。

一次試験では受験者の教養や専門性を評価し、採用予定数のほぼ半数は合格します。

二次試験ではさらに、受験者の人間性や教員としての適性を見ます。

つまり、「この人は教員として学校の仕事を任せてもよい人材なのか」を見極める試験なのです。そのため面接や論文、模擬授業等を通して教員としての適性・人間性を評価します。

学力試験は数字でその人の実力が可視化できますが、「人間性」を数字で表すことはなかなかできません。

どうやって“品格”と“教養”のある人物なのかを見極める基準が面接・論文・模擬授業・集団討論等です。

面接では面接官が、はじめの5秒でその人の印象を決めてしまいます。

また、話しはじめて20秒で評価はできるといいます。

二次試験は、人対人の試験であるため、一人では練習できません。面接の練習には面接官が必要ですし、論文も添削してくれる人、模擬授業・集団討論も相手が必要です。

そのため、練習をともにしてくれる友だちが必要です。教員採用試験を受けるにあたっては、二次試験対策と一緒に頑張れる友人・知り合いを見つけておくことも大切です。

人前で自分の考えをきちんと整理して時間内にわかりやすく相手に伝えることができるようになるためには相当の練習と慣れが必要です。日頃から、ことばで相手に思いを伝える習慣をつけることが大切です。

できれば、美しい敬語を使う大人との会話を心がけましょう。

(1) 論文対策（実施されない自治体もあります）

教員採用試験には、筆記試験ばかりでなく、面接試験、適性試験、論作文試験、と様々な試験を課し、あらゆる角度から受験生を評価します。「筆記による面接試験」ともいわれ、教師としての資質・適性、指導力、教職への情熱などが評価されます。出題テーマは「教育論」「教師論」「生徒指導・学習指導」「抽象題」などに大別されます。具体的には、「道德教育について」「基礎・基本の定着」「わかる授業」「個性を生かした教育」「ICT教育」「情報化の光と影」「確かな学力」など教育改革に関するテーマが近年よく課されています。「新型コロナウイルス感染拡大防止」などの時事ネタも予想されます。制限字数は800～2000字、時間は40～90分といったところが一般です。

①人間性を把握しようとするのが論作文試験

特に近年は、人物重視の傾向が顕著となり、今後もこの傾向は続くものと予想されます。従って論作文が採用試験の中でも重要視されることは明らかです。

重要なことは、教育課題を評論家的に一般論で解説するのではなく、教師の立場に立って、授業など具体的な実践を中心に論述することです。採用者側は、本を読んでいる人ではなく、現場で実践する教師を求めています。

②教員採用試験の論文は、大学のレポートではない

「序論」「本論」「結論」などの構成で簡潔に、教職への強い決意を示すことなどが文の中にわかりやすく盛り込まれているかを評価します。何を言っているかわからぬようでは生徒にも授業はできません。

自分の考えと文章を練り直すためにも、同じテーマで繰り返し書き、誰かに添削してもらいましょう。添削者は、校長経験者や指導主事経験者がベストです。

③表記、表現上の基本も押さえておく

誤字・脱字や文字の乱れは、論作文の内容を評価される前に、教師として不適格と判断されてしまいます。教職への情熱を行間ににじませられるよう、誠意をもって丁寧に書く習慣をつけましょう。

「原稿用紙の正しい使い方ができているか」

- ・ひとマス空けて書き出す
- ・改行などのルール

- ・「」の終わりには句読点を打たない等
- 「文体が統一されているか」
 - ・常体「である。」「だ。」と敬体「です。」「ます。」の混用をしない
 - ・敬語（丁寧語・尊敬語・謙讓語）が正しく使えるか
- 「句読点、カッコは適切な位置に書かれているか」
 - ・一文が長い場合、区切る場所が適切か
 - ・会話は「」に入っているか
- 「仮名と漢字が適切に使われているか」
 - ・「こと、ため、ところ、もの、わけ、うえ」などは仮名書き
 - ・「子ども」（子供はNG）
- 「文法上正しい文章になっているか」
 - ・主語と述語の呼応
 - ・修飾語と被修飾語がはなれすぎているか
 - ・助詞「て、に、を、は」の正しい使い方
 - ・動詞の態（受動態能動態）
 - ・語句を正しい意味で用いているか
- 「簡潔でわかりやすい文になっているか」
 - ・一文が長すぎないか
 - ・同じ語句または同意の語句の繰り返しはないか
 - ・回りくどい表現はないか
 - ・修飾語が長すぎないか
- 「教育用語を正確に用いているか」
 - ・「児童」「生徒」「学生」「保護者」等（父兄などはNG）
- 「俗語・流行語を用いていないか」
 - ・カタカナ言葉はなるべく使わない
 - ・略して記さない
- 「字数は適当であるか」
 - ・指定された字数の9割以上は埋めましょう

論作文の受験対策は、多くの文を読み、自分自身で実際に論作文を書いてみるのが最も効果的な方法です。そのため、時間を設定して実際に原稿用紙に論作文を書くことが大切です。日頃パソコンを使用していることが多いと簡単な漢字でも咄嗟に思い出さないことがあります。鉛筆で書く練習が大切です。

（2）面接試験対策

①教師としての資質・能力を知りたい

面接試験は主に二次試験で実施され、個人面接、集団面接のほかに、集団討論、模擬授業、場面指導などの試験があります。評価基準を踏まえた対策と場数を踏む練習が不可欠です。教員の資質・能力の向上を前提に、近年、ますます「人物重視」の傾向が強まっています。実践的指導力やコミュニケーション能力を見るために、学習活動や生徒指導上のさまざまな場面を想定した場面指導や、実践的な指導力を見る模擬授業を導入するところ

が増えてきました。面接官は「態度・礼儀」「身だしなみ」「話し方」「応答の内容」などから、積極性・意欲、表現力、判断力、教育観、資質を評価します。自治体が公表する「評価の観点や基準」は必ずチェックしておきましょう。

②評価のポイントは、自分と同じ職場で働ける人物かどうか

教室で子どもたちにしっかり指導できるか、職員室で協調して働けるかなど、具体的にイメージして評価します。表現力や対応力、誠実さや教職への情熱などを質疑応答のキャッチボールの中で伝えていく必要があります。

③人に接する際の基本的態度やマナー

- ・あいさつや言葉遣い、表情や動作など、人前できちんとした振る舞いができているか
- ・基本はいつも笑顔です
- ・清潔な服装（スーツ、靴、カバン）、髪型（ヘアカラーはNG）で臨んでいるか

④志望の動機、意欲や熱意

- ・教職を志した動機、教職への熱意を持っているか
- ・あこがれだけでなく、具体像があるか

⑤これまでの経験から学んだこと

- ・自分の経験から何かを学び、アピールできるものを持っているか
- ・「授業」「サークル」「ボランティア活動」「アルバイト」などの経験はこれからの教育活動にどう生かされるのか具体的に述べるができるか

⑥教育の話題に関する基本的な知識、理解

- ・質問の内容には、必ず学校教育に関するものがある。その知識を持っているか
- ・時事問題に精通しているか（社会の常識を知っている教師）
- ・「児童生徒の問題行動等の調査」に係る数字を理解しているか
（いじめ、不登校等の最新の数字が答えられるか）

⑦与えられた質問を理解する力とそれに対する応答能力、表現力

- ・質問の内容をよく理解しているか
- ・質問に対して、自分の考えを導き出し、それを適切なことばで表現する力を持っているか

⑧物事に対する考え方

- ・教育活動を行うにあたって望ましい考え方をしているか
- ・バランス感覚のある人物か

(3) 心得と対策

面接試験の対策として、まず心得ておかなければならないのは、試験対策を何日間か行えばうまくいくというものではない、ということです。面接官に面と向かえば、その場限りの態度はすぐにわかってしまいます。

そもそも面接官は、あれこれ質問することで、その場限りの態度ではないかということを見抜こうとしているのです。したがって、日頃からの様々な人々に対する振る舞い方を整えておく必要があります。

また、志望の動機や教育に関する質問への応答についても、直前に文章を丸暗記したのか、あるいはしっかりと自分のものになっているのかは、面接官が聞けばすぐにわかります。

自分の考えや意見を相手にわかりやすく、伝える力や相手の意図していることを的確にとらえて答える力をつけておきましょう。

それを踏まえた上で、必要とされる対策を具体的にいくつか示してみます。

- ①年上の人と話をしたり、公的な場で自分の意見を述べる機会を積極的に活用し、丁寧で適切な接し方や発言が自然にできるようにしましょう。
- ②志望の動機について、学校生活や教育実習の体験と結びつけて教職への思いを述べるができるようにしておきましょう。
- ③自分自身の大学生活が有意義であったとアピールできるように、積極的にサークル活動やボランティア活動などに参加しましょう。
- ④学校教育に関する質問に関しては、
- ・最近の教育政策や教育事情を知るために、文部科学省の重要な答申をよく読み、理解しておきましょう。これは、文部科学省のホームページにも掲載されています。
 - ・最近の教育問題について、新聞を読んで教育関係の記事をスクラップしたり、教育に関する特集番組などもチェックしておきましょう。
 - ・生徒の指導の仕方について、自分だったら具体的場面でのように対処するかをイメージしましょう。このとき、法律で禁止されていること（たとえば体罰）や、答申や通達のなかで適切だとされていることを知っておくと良いでしょう。
 - ・教育学の基本的な文献をよく読み、自分自身の意見を持つことができるようにしましょう。
 - ・複数人で教育の問題について自主的にディスカッションしましょう。
- ⑤情報誌等で、自分が受験する都道府県や市の出題傾向を把握しておきましょう。

(4) 基本的な態度やマナー

- ・部屋に入る前にコートやマフラーは外しきちんとたたんで腕にかけるか、荷物置き場に。
 - ・順番が来たら右手の中指の関節くらいで軽く3回ドアをノックします。
 - ・ドアを開け、その場で「失礼いたします」と静かに挨拶します。
 - ・部屋に入り椅子の横に立ち、すすめられてから着席します。
 - ・カバンは足下に。机や椅子に置かないこと。
 - ・着席したら背筋を伸ばし顔をあげて印象を良くしましょう。
 - ・一度に二つの動作をしてはいけません。
- (ドアを開けながらお辞儀をしたり、座りながらあいさつしたり、等)
- ①服装・髪型は、第一印象を大きく左右します。
- 第一印象は、その後の面接官の評価に大きく関係しているため、清潔感のある、教育者としてふさわしい、誠実さが感じられるものにしましょう。
- ・男子のネクタイは柄の派手でない紺色がおすすめです。
 - ・女子はシャツのボタンはすべてとめ、スカート丈はひざがかくれるくらいが上品です。
 - ・男女ともヘアカラーは厳禁です。女子は前髪が目にかからないよう、地味なヘアピンでまとめます。
 - ・ピアスは厳禁ですが、穴が開いているのもおかしいので早めに対応しておきましょう。
- ②はっきりと明るい口調で挨拶をする。
- ・語尾が聞き取れないような小さな声では教員として教壇には立てません。
 - ・「たぶん」「と思います」といった表現は自信のなさや無責任さを感じます。
 - ・正解のない問いには「私は〇〇と考えます」とはっきり答えましょう。

- ③座るときは男子の場合、手は軽く握って膝の上に置き、足は投げ出さないように。
女子は右手を下にして軽く両手を重ねます。
- ④面接官に対して誠実に応答していることが分かるような視線のやり方を心がけましょう。
 - ・緊張してどうしても相手の目を見ることができない場合は、面接官のネクタイの結び目付近を見るようにして、極力視線を落とさないようにしましょう。
- ⑤舌を出す、頭をかく、肩をすくめる、貧乏ゆすりなどの癖を出さないようにする。
- ⑥全体としてけだるそうな印象を与えないようにしましょう。
 - ・あなたが自分の子どもをどのような先生にあずけたいかを考えれば、どのような態度がふさわしいかイメージができます。

(5) 感じの良い応答

- ①面接官の質問をよく聞いて答える。
 - ・どのような問いかけにもまずは「はい」と答えてから話します。
- ②あまり長く沈黙しない。質問が理解できないときは、その旨をはっきりと伝えましょう。
 - ・聞き取りにくいとき、質問の主旨がわからないときは聞き直す方が誠実です。
- ③相手に伝わるように、思いやりを持って丁寧に最後まで話す。
 - ・相手に伝わることを選びましょう。自分だけがわかっていることや専門用語、略した表現は相手に失礼です。
- ④面接官や他の受験者の質問や話を途中で遮らず最後まで聞きましょう。
 - ・とくに集団面接やディスカッションのときは他の人の話を最後まで聞くこと、そして否定や批判、評価を下すような言い回しは避けましょう。
- ⑤自分の発言に自信を持つ。
 - ・ときには知らないことを問われることもあります。
知らないことやわからないことに対しては「わたくしは、存じ上げません」「勉強不足で知りませんでした」などと素直に表現しましょう。
 - ・信念や自分の考えは自信を持って大きな声で発言しましょう。

(6) 言葉遣い

言葉遣いは使い慣れていなければ、急には上手くいきません。

日頃からはじめあるコミュニケーションをとる癖をつけましょう。

また、俗に言う「バイト敬語」（「〇〇になります」「～でよろしかったでしょうか」など）を使わないことが大切です。

- ①自分のことは「わたし、わたくし」と言う。
 - ・「自分」はNG
- ②語尾まではっきりと話す。
 - ・あいさつも同様ですが、語尾まではっきりとゆっくりと話しましょう。
 - ・語尾は「です」「ます」調です。
- ③敬語（丁寧語・尊敬語・謙譲語）を正しく使いましょう。
 - ・「父」「母」など身内は謙譲語です。
これらは、「個人面接」でも「集団面接」でも同様にできていなければならない内容です。日頃の習慣がも

のをいいます。

(7) 集団討論

受験者5～8人に対し、面接官2～4人、時間は30～40分が一般的です。

受験者全員が自己PRなどをした後、教育観や生徒指導場面などについての質問に対して順番に、あるいは挙手順で答えます。

「ディスカッション形式」や「ディベート形式」がありますが、受験者同士で一つのテーマについて討論するものです。

自治体ごとに傾向の違いはありますが、多くの県で課されるテーマは生徒指導に関するものが多く、教育時事から「少子化対策」「地方創生」「政治の動向」なども頻出します。

①ここで評価することは「まわりの意見をしっかりと聞けるか」「自分の意見を適切なタイミングで挟み込むことができるか」といったコミュニケーション能力です。自分だけが長く話したり、他の受験者が発言しているときに別のことを考えていたり、自己中心的な対応をしていないかを評価します。

②教師としての主体性、主導力、構成力（ロジカルシンキング）、協調性が適性として身につけているかが問われます。司会やまとめ役などは立候補して積極性をアピールするのも一つの方法です。

③説得力のある話し方には「具体例」が盛り込まれています。

単に「～だと思います」ではなく「○○なので○○だと思います」といった根拠の提示をしましょう。

(8) 模擬授業（場面指導）

模擬授業はその場で与えられたテーマ、単元、で受験者が教壇で実際にどのように振る舞うかを評価します。

評価項目を以下に示します。

①授業のプランニング力

- ・どのように授業を行おうとしているかが整理されている
- ・説明、問いかけがバランス良く校正されている
- ・授業を見終わったときに本時のねらいが何であったか理解できるか
- ・授業を通して評価の視点が明確か
- ・教科指導の理論及び学習指導要領の動向の理解
- ・児童生徒に考えさせたり、表現させたりして児童生徒の学活動の様子が現れているか
- ・教師の一方的な説明になっていないか

②教科そのものの知識や技能の高さ、教材の理解の深さ

- ・教師が教科内容を十分理解していることや技能を持っていることが感じ取れるか
- ・児童生徒に理解させるための何通りかの提示の仕方を持っているか

③授業のパフォーマンス力

- ・テンポ良くメリハリのある授業か
- ・児童生徒との関わりが見えているか
- ・児童生徒が理解できる板書ができていないか
- ・児童生徒のかかわりで、承認、賞賛、激励、助言が適切にできているか

以上が実際の教員か採用試験で評価される項目です。

つまり、授業はコミュニケーションです。

教師が一人で話し続ける授業は生徒であった自分も退屈だったはずです。

あたかも、そこに30人の生徒がいるように、やりとりをしながら明るく、はつらつとした教師として授業をしましょう。

4. 「公立学校」と「私立学校」の違い

教師として仕事をしたいということが自分の進路選択であるならば、公立学校に限らず、私立学校に勤務することも考えられます。

大きな違いは、公立学校には定期的に人事異動があり、教員人生の中では大規模校、小規模校、採用自治体管内の東西南北様々な学校で勤務することができます。

人間関係も広くなり多くの教育実践が経験できます。

私立学校には、系列の学校以外には人事異動はありません。教員としての生活を一つの学校で過ごすことになります。部活動などは指導者が継続的に生徒を育てられるため、長期的に実績を残すこともできます。また、独自の教育方針で教育活動ができます。

採用方法も大きく違います。

私立学校の場合は一般企業の採用と同じように各校が「教科」「科目」を指定して独自に募集するところがほとんどです。

そのときに必要なのが「履歴書などのエントリーシート」「大学からの推薦状」「小論文(作文)」です。これは、面接などの二次試験の参考にするため、面接重視であることも意識しておきましょう。

また、私立学校では「私学教員適性検査」を受け、その結果を使いながら各学校を受験するのが一般的です。これは私立学校教員のためのセンター試験のようなもので、教職教養と専門教養についてA～Dの評価がつき、評価が高いほど採用される率が高くなります。詳しくは各県の「私学協会」に問い合わせることで情報を得ましょう。

むすびに

私は2021年3月で教員生活を卒業します。

大学卒業後22歳で公立中学校の正規教員となり、全ての学年の担任、生徒指導主任、部活動顧問などを経験し、生徒指導担当指導主事として長年教育行政にも関わりました。その間には生徒指導困難校、新設校の創立、文部科学省主催の全国の教職員研修と実に様々な仕事をしてきました。

多くの教育課題に向き合っていた時、学校だけでなく、子どもには保護者がいる、そして取り巻く社会があるのだと考え、教育委員会を出て知事部局での仕事を希望しました。

「先生の常識」は“世間の非常識”と言われる意味も考えたかったです。

生活環境部では男女共同参画に係る仕事、総務部では人事、人材育成、キャリアカウンセリングの仕事もしてきました。

それは、後の人生を歩んでいくうえで大きな力となりました。

何日もの徹夜、時には自宅に戻れない過酷な状況や、心を痛める悲しい現場で仕事をしたこともあります。辛いことも苦しいこともたくさんありましたが、それにも増して教師という仕事にははかり知れぬ喜びがあるので、

子どもたちが大人になり、皆、自分を超えていく。

校長先生になって素晴らしい学校を作っている教え子、大企業の経営者となって多くの人々のリーダーとして活躍している教え子、天下一品の料理人、警察幹部…どんなに偉くなっても、どんなに歳を重ねても、皆「けいこ先生」と言って慕ってくれることです。

子どもたち、学生たちとの出会いは形には残らずとも私の人生の中で一生錆びることなく、かけがえのない宝物として無限に蓄積され、輝き続けています。

10年後も20年後も機械や人工知能にはまだまだできないこと。

それは多くの教育課題に対して「正解がなくても、考えようとする」ことです。

そして仕事に対して「楽しい」「やってみたい」「これ、好きだ」と思えることです。

子どもたちの未来は無限の可能性と幸福に満ちています。

ゴールに向かい、伴走するステキな先生になってください。